FD Newsletter

創刊号

発行日　2012(平成24)年10月1日

長崎純心大学　教育開発推進委員会

〒852-8558　長崎市三ツ山町235　TEL095-846-0084　FAX095-849-1894

目次:

教職員FD研修会報告　2

授業改善の取り組み　3
「学生による授業アンケート」の実施概要と今後の展望
授業参観の実施概要とそれを基にした授業改善への取り組み

教育内容・方法の改善のための取り組み　4
「文献講読演習Ⅰ」の取り組み
シラバス様式の電子化
GPA導入

長崎純心大学におけるキャリア支援の取り組み　5

コラム　ひといき

報告「新たな認証評価制度の概要」　6

SD研修の現状と今後の課題　7

教育開発推進委員会活動報告　8
編集後記

「FD Newsletter」発行への期待

理事長・学長　片岡千鶴子

本学は大学基準協会による 2010(平成 22)年度の大学評価〈認証評価〉を受け、2011(平成 23)年 4 月 1 日付で「大学基準適合認定証」を受理した。大学基準の審査項目の一つに「教育方法」がある。それは教員の普段の教授法改善の努力によって如何に学生の学びが深まっているかを問うもので、私たちが一般に「FD」と呼んで実施しているものである。

大学における「FD　Faculty　Development」は、2008(平成 20)年に大学設置基準第 25 条の三「大学は当該大学の授業の内容及び方法の改善を図るための組織的な研修及び研究を実施するものとする」と規定され義務化された。

本学においては既に 2004(平成 16)年から「大学教育センター」が実施している学生による授業評価アンケート、結果の学生への公開及び教員へのフィードバック、さらに教員相互の授業参観、毎年開催している定期FD研修会等の実績が積まれており、審査においても一定の評価を得た。しかし、私たちはそれに決して安住してはならないという共通の認識を持っている。特に少子高齢化の急激な流れのなかで高等教育の大衆化、ユニバーサル化が進み、大学教育の「質保証」が重大な課題として浮上している現実があるからである。併せて認証評価制度が 2010(平成 22) 年度で最初の 7 年間の区切りである第一サイクルが終了した。急速に進むグローバル社会における大学教育のあり様は今日の日本の国家的課題となっている。評価機関は第一サイクル期間の課題を検討修正して第二サイクルの認証評価作業に着手している。本学ではこのような現状に対応してゆくため「大学教育センター」を「教育開発推進委員会」と改めた。これからの中・長期を見据えた純心教育の目標達成のために、「FD　Faculty Development」活動を、どのように構築していくかを委員会に期待しての改編である。本学の「FD」の目標は学生が「知恵のみちを歩み、人と世界に奉仕する」人間に成長するために真の「学士力」を体得させることである。そのためには学びの共同作業が教職員と学生が一体となって喜びを見出すものになることが必要である。

原爆被災後の学園再興の途上にあった 1950(昭和 25)年に短大が創立された時、当時の思い出を書き残した教授のエッセイに、「学生たちはよく勉強した。設備は不十分で苦しかったが、私たちも楽しかった。」とある。ここに純心教育における「FD」の原点があると思う。「FD　Newsletter」の発行が純心教育「FD」の更なる推進に活力をもたらすものになることを願う。

Japan University Accreditation Association
UNIVERSITY ACCREDITED
2011. 4～2018. 3
財団法人大学基準協会
大学評価適合認証

教職員FD研修会報告

本学では前身の純心女子短期大学の時代から毎年度末の3月に全教職員が参加しての教職員研修会を開催し、日常の教育研究の在り方を自己点検し、また高等教育を取り巻く社会・教育環境についての知見を深めてきた。しかし、大学教育の質保証という最近の社会的要請を受け、2008（平成20）年度からはより組織的にプログラムを組み、FD研修としてその内容の充実を図っている。

教職員FD研修会の内容（平成20年度～平成23年度）	
2008(平成20)年度 平成21年3月5日	［テーマ］ 学生の「学び」の質を高めるために －中教審答申「学士課程教育の構築に向けて」を受けて－ ［基調講演］ 学士課程充実のための長崎大学の取り組み 〈講師〉斉藤寛氏（長崎大学前学長） ［分科会］ 分科会1：厳格な成績評価をどう実現するか 分科会2：初年次教育をどう効果的に展開するか 分科会3：1単位45時間の学習をどう実質化するか 分科会4：学生の学びの質を高めるにはどう授業を展開するか 分科会5：本学の教育は社会の声に応えているか
2009(平成21)年度 平成22年3月4日	［テーマ］ 点検評価報告書(認証評価)を基に本学の教育の現状と課題を考える ［基調講演］ 成績評価とGPA　〈講師〉半田智久氏(お茶の水女子大学教授) ［分科会］ 分科会1：日本語での読解力を高めるための教育の現状と課題 分科会2：スムースに学生生活をスタートさせるための初年次教育の現状と課題 分科会3：キャリア教育の現状と課題 分科会4：教育の国際交流の現状と課題 分科会5：授業改善に向けた取り組みの現状と課題
2010(平成22)年度 平成23年3月3日	［テーマ］ われわれは何を目指すべきか？－本学のディプロマポリシーを考える－ ［基調講演］ 大学と職業との接続を考える －日本学術会議「大学教育の分野別質保証の在り方について」からの提言－ 〈講師〉高祖敏明氏（学校法人上智学院理事長） ［パネルディスカッション］ 長崎純心大学におけるキャリア教育の今後の方向性について 〈パネリスト〉キャリアセンター主事　米倉幸生氏 大学教育における学生活動－大学教育全体を通じての教育活動－ 〈パネリスト〉学生委員会委員長　熊野晃三氏 児童保育学科の卒業生は職場でどのように評価されているか 〈パネリスト〉大学教育センター主事　石田憲一氏
2011(平成23)年度 平成24年3月7日	［テーマ］ 大学評価時代を生き抜く方策を考えよう －認証評価から学生とのコミュニケーションまで－ ［報　告］ 新たな認証評価基準と本学の課題　教育開発推進委員長　畠山　均氏 ［講演とワークショップ］ 学生のココロをつかむ伝え方 〈講師〉室井俊男氏（有限会社プライミング代表取締役） ［研修会の様子］ 講演する室井氏 講演者へ質問

授業改善の取り組み

教育開発推進委員会委員長　石　田　憲　一
（児童保育学科教授）

「学生による授業アンケート」の実施概要と今後の展望

「授業アンケート」は、本学の教員の全てを対象としている。授業後に履修生に対してアンケートへの記入を求め、その結果を科目担当の教員の授業改善に役立ててもらうことを目的とする。専任教員は、担当する教科の中から2科目を、非常勤教員は1科目を任意に選び実施している。学生は、カードの設問に対して、5段階で評価する。

2004（平成16）年度から「学生による授業評価アンケート」との名称で、これまで毎年度実施してきたが、授業は学生と教員がともに創っていくものだとの理解から、2011（平成23）年度からは「学生による授業アンケート」と改称され、今日にいたっている。それに伴ない、アンケートの設問が改められた。授業に関する質問のみが設定されていたものから、学生自らの授業態度をふり返る項目が加えられたのである。「私は、私語・飲食・携帯電話の使用を慎み適切な態度で授業に出席した」と「私は、この授業に対し、意欲的に取り組んだ（熱心な授業態度、予習・復習をするなど）」の2つの質問項目がそれである。学生は授業について評価を行うのみならず、自らの授業に対する姿勢も自問する。これは授業が、教員から学生へ、学生から教員へという双方向なものであるべきだとの考えに基づく。授業に関する質問については従来通り、「授業の概要と目的（シラバス）が授業に反映されていた」「教員の声や言葉は聞き取りやすかった」等の基本的な質問に加えて、「授業時間はだいたいにおいて守られていた（開始時間・終了時間）」「この授業に満足し、後輩や友人に勧めたいと思う」の新しい設問が加えられた。さらに、授業の環境についても質問が設定された。それは「教室の広さは適切であった」「廊下や隣接する教室など、教室外からの騒音は特に気にならなかった」等の質問である。

今回の改定で、「授業アンケート」の質問項目に「学習環境」の項目を加えたことは、その結果を授業改善にフィードバックさせる際に、これまで以上に大学が組織的に取り組まなければならないということを意味する。授業改善は科目担当者の工夫によるところが大きいが、学習環境を良くしていくには、一人の科目担当者以上の、様々な分野の大学教職員の協力が必要だからである。教育開発推進委員会には課題を整理分析し、学内の担当者に伝えるコーディネーターとしての働きも求められている。

授業参観の実施概要とそれを基にした授業改善への取り組み

教員が相互に学び合える機会を提供するために、専任教員相互の授業参観を2008（平成20）年度後期から実施している。専任教員は1コマ以上を授業参観のための授業として提供し、他の教員の授業を1コマ以上参観する。授業参観後、参観者は授業の担当教員に対して、紙面でフィードバックを行う。

2011（平成23）年年度末に、授業参観について専任教員に対して行ったアンケート調査では、「授業を参観したことは、自らが担当する授業の改善に役立つと思うか」との質問に対して、71パーセントが「役に立つ」と回答している。以下、「とても役に立つ」が17パーセント、「あまり役に立たない」が7パーセント、「どちらともいえない」が5パーセントという結果であった。授業参観を、約9割の専任教員が肯定的に評価している。

授業参観が授業改善に生かせると答えた具体的な理由は、「良かった点を書いてもらえば励みになる」「普段の授業で工夫していることを高く評価していただき、励みになった」など、授業担当者の自信や自負につながっているとの意見、「よい授業を参観することで、自分の授業を改善するきっかけになる」「他の先生が、どのように時間配分や進行をしているのか、また学生のリアクションも参考になった」といった他者の授業を参観することで、授業改善の様々なヒントが得られるという意見、「教室の後ろに座る学生の様子が把握できていなかったことがわかったので、今後、改善したい」「別紙にワープロでたくさんコメントを書いてくださった。学生の文献発表のときのコメントのタイミングについてなど、大変具体的な感想をいただいた」など授業参観者からのコメントが役立っているという意見がみられた。

一方で、授業参観が授業改善につながらない理由としては「参観に行って思うところがあっても、相手には良いことのみしか書けないし、伝えられない」「関連する科目で、参観可能な科目が少ない」「演習授業が多く、参観したいと思うものがない」「まずは、自分の教授法改善の研究、または勉強会等をした方がよいと思う」などがあった。こうした点にも留意しつつ、より良い授業参観や授業改善へ向けた方法について、今後も教育開発推進委員会のメンバーで検討を重ねていくことが必要である。

教育内容・方法の改善のための取り組み

「文献講読演習Ⅰ」の取り組み

教育開発推進委員会委員　坂　本　雅　彦
（児童保育学科教授）

「文献講読演習Ⅰ」は、大学生に必要な読解の基礎的能力の養成を主な目的として、1年生全員に履修を義務づけている共通基礎科目の一つである。そこでは「読む」技術はもちろん、述べられた内容の要約や著者の見解に対する自分の考え等を「書く」こと、「話す」ことも含め、言語技術全般の総合的な向上が意図されている。授業は週1回、教員1名に対し学生15～20名程度（学生数は年度毎に若干の変動あり）の学習者集団を組織して実施される。

1994（平成6）年の大学開学以来、本科目は一貫して開講されているが、基礎科目の中でも中核的な科目の一つであることから、その実施のあり方がしばしば議論され、改善の試みがなされてきた。例えば、始まった当初は、“全学科混成・比例配分”の原則で学習者集団を編制し、一人の教員が同一の学習者集団の指導を年間通して担当する方式であったが、2004（平成16）年度からは、(1)まず、学習者集団に〈比較文化＋人間心理＋英語情報〉の3学科の学生のみを混成したクラスと〈現代福祉＋児童保育〉の2学科の学生のみを混成したクラスの2種類を設け、かつ、(2)各クラスの指導を、前期と後期とで別の担当教員に委ねる方式へと改められた。また、同じく2000年代初頭、比較文化学科教員を中心に組織された「教養教育研究会」の努力によって『文献講読演習Ⅰ　教材集』が作成（2004年3月；改訂版2005年3月）されたり、成績評価基準を示す具体的な数値を共通シラバスのうちに明記（前期は「要約40%、発表・討論　40%、期末レポート　20%」、後期は「要約又は中間レポート　30%、発表・討論　30%、期末小論　40%」）するようになったことも、一つの進歩であった。

2011（平成23）年度には、授業の組み立て方に関する教員同士の情報交換をねらいとして、各クラスの授業計画や、実際に授業で使用されたプリント等を収録した冊子〈「文献講読演習Ⅰ」参考資料集〉を作成、担当者に配布した。また、担当者一同にアンケートで意見を聴取した結果、通年2単位の科目として本科目を設置するよりも、前期分と後期分をカリキュラム上、独立した科目として扱う方が、成績処理等の面で都合がいいと考える教員が圧倒的に多いことがわかったため、2012（平成24）年度より実際そのように科目と単位を分割（前期「文献講読演習Ⅰa」1単位、後期「文献講読演習Ⅰb」1単位）した。

学生による授業評価の結果からは、「文献講読演習Ⅰ」については例年、受講者から比較的高い満足が得られていることがわかっている。三百数十名の1年生を15名程度のグループで指導するには20名以上の教員が必要であり、それだけ多くの教員の親身な指導姿勢と授業上の数々の工夫によって、この科目への高評価が支えられているといえよう。

とはいえ、本科目が当初から抱え込んでいた数々の矛盾は、過去の再三の見直しによっても、なお解消せぬままとどまっているのが実情である。今は紙幅の都合上、これらの「矛盾」について詳しく論じることはできないが、一つだけ、大学組織に関わる大きな問題として指摘したいのは、本学にはまだ（2012年8月現在）、初年次教育のあり方全般について集中的に討議し、検討の上で改革の実行へとつなげていくための責任ある部署が存在していないということである。「文献講読演習Ⅰ」が内包している矛盾についても、この、本学における初年次教育及び「基礎科目」のカリキュラムという大枠のあり方が議論されていく中で、筋の通った解決が示されることを期待したい。

シラバス様式の電子化

本学のシラバスは2012（平成24）年度から電子化され、学生は本学のポータルサイトであるJunshinVisionからいつでも閲覧できるようなった。シラバスは全学的に統一した書式で書かれ、科目名や単位数、開講時期などの科目の基本情報の他に、授業の「ねらいと概要」「到達目標」「毎回の授業計画（半期科目は15回、通年科目は30回）」「授業方法」「学習方法」「テキスト」「成績評価の方法」「履修上の注意」の8項目の記載が義務付けられている。

GPA導入

本学は2009（平成21）年度からGPA（Grade Point Average）について検討を重ね、2012（平成24）年度入学生から従来のA＋、A、B、C、F、による成績評価に加え、GPAによる成績評価を導入した。

長崎純心大学におけるキャリア支援の取り組み

教育開発推進委員会委員
キャリアセンター主事
米 倉 幸 生
(現代福祉学科准教授)

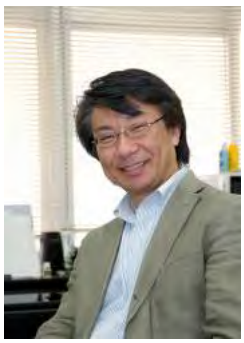
長崎純心大学におけるキャリア支援の取り組みは、「直接的な学生のサポート」と、「大学教育におけるキャリア教育の構築と実践」によって構成されている。

前者については、一般企業、福祉施設や幼稚園・保育園、さらには大学院進学志望者等が混在することによる就職活動の長期化と、Webサイトを利用した就職活動(情報収集及び応募)の普及に対応することが必要だった。そこで、2009(平成21)年度大学教育・学生支援推進事業、【テーマB】学生支援推進プログラムに採択された「キャリアデザインアクションプログラム～選ばれる人材開発～」を利用して「キャリア支援システム」の開発を行い、これまでキャリアセンターでしか見ることができなかった情報に、端末(PC)さえあればセンター以外の場所からでもアクセスすることができるようにした。そして、学生がそれに登録すれば卒業後も既卒者対象の求人情報へ自宅からアクセスすることが可能となった。学生は、JunshinPortal(本学専用オンラインツール)にログインし、次に「キャリア支援システム」を開くと、企業情報検索や求人情報検索といったメニューが提示される。例えば興味がある業種にチェックをしておくと、求人票が来るたびに予めアドレスを登録している携帯電話やPCに求人票がきたことを知らせるメールが届くようになっている。中でも、今回“就職試験に関する報告書の記入と閲覧”ができる機能を持たせたことはとても重要な改善(発展)だと考えている。なぜなら、学生にとって一番役立つ情報は、先輩や同級生が実際に就職試験に臨んだその経験だからである。『こんな問題が出たぞ。』『こんな事聞かれたよ。』『今まで個人面接だったのに今年は集団面接になってびっくり！』というように、経験者だけが伝えられる生の就職試験情報がたくさん集まっている。毎年の更新、積み重ねによって、これから社会に出る学生(卒業生)への魅力的なデジタルアーカイブが出来るのではと期待している。このように、情報提供の迅速化とユビキタス化、そしてデータベース化という点で従来のものよりもはるかに進んだシステムとなった。また、同時に配置されたキャリアカウンセラーに対する相談件数は年々増えており、その指導の下、内定(内々定)学生による「就勝(しゅうかつ)新聞」も発行・掲示され、そこでも学生からの情報発信が行われている。

後者については、2010(平成22)年度より「キャリアデザイン(2年次選択科目)」が専門科目として開講された。受講者数は初年度140名、翌年は234名と推移しているように学生の関心も高まっている。例えば最初の年はまだ受講生も少なかったため、「もし足の不自由な方がグラバー園に観光に行くとしたら…」という設定の下で、学生各自が旅行プランを作成したものに対し、旅行代理店や本学の他の先生にも加わっていただきコンペティションを行った。一部の学生は実際に現地見学に行くなど、体験学習的要素も取り入れながら授業を行っている。また、現在1年次に性格分析テスト、3年次にSPI-2模擬テストとそれぞれの解説講座を実施して、進路選択をする際の手がかりとなるものを全学生に提供している。さらに、いち早くインターンシップを単位化したこと、入学時から卒業までに計7回の全学一斉キャリアオリエンテーションを実施している事などは、他の大学にはない特徴である。各種のキャリアアップ講座、セミナー、検定試験、ガイダンス等と通常の授業とを組み合わせることで、キャリア教育が体系(可視)化できるよう努めている。

ひといき

「教える」ということへの学び



松 本 俊 穂
教育開発推進委員会委員
児童保育学科教授

今日多くの大学で授業改善が試みられています。本学においても然り。授業アンケート、授業参観等さまざまな試みがなされています。

ところで、私の授業(音楽系科目を担当)に関する今までの考え方は以下の通りでした。それは一部分今でも変わらないところはあります。「授業は一人一人の教員の個性にしたがって行われるべきものだ。きまった授業のやり方なんてあるはずがない。授業の資産は自分の個性であり、今までの学生とのやり取りの中で蓄積してきた経験である。できあいの教授法なんてあてにならない･･･」。そんな考えの中、新学期が近づくと、曲がりなりにも一教員のはしくれとしての血が騒ぐのか、「何かユニークな方法や題材で授業を行ってみたい。」などと考えるようになります。同時に、過ぎ去った授業の事を思い出し、いろいろ手をつくして授業に臨んだのに、うまくいかなかった。学生の反応はさっぱりだった。などと落ち込み、つい「だから最近の学生は･･･」と愚痴をこぼし、もっと落ち込むと「やっぱり俺って人格的に魅力がないんだよな･･･」などと人格否定に走るのです。

さて、ここ数年先生方の授業を拝見することにより、「教える」ということをより客観的に考える機会が増えたと感じています。その一つに「教える」ということが楽器を弾く事、自動車の運転と同じようなこと、つまりいくつかのスキルの集まりだと感じていることです。「教える」ことを繰り返し学び、練習する。「教える」という事を一歩外側に立って教える。「教える」ことへの学びはこれからも続きそうです。

報告「新たな認証評価制度の概要」

教育開発委員会委員　畠　山　　均
（英語情報学科学科長）

1. はじめに

2004（平成16）年からすべての大学は7年に1度、文部科学大臣が認めた評価機関による評価を受ける事が義務付けられている（認証評価制度）。本学は2010（平成22）年度に大学基準協会の評価を受け、大学基準に適合していると判定された。

2004（平成16）年度に始まったこの認証評価制度であるが、その後の大学を取り巻く社会環境の急激な変化や認証評価に対する各大学の負担軽減の必要性などを背景として大学基準協会は2011（平成23）年度から新たな認証評価制度を導入した。ここでは大学基準協会の新認証評価制度の目的、内容、方法の概要を報告する。

2. 何のために評価するのか

大学が日常的に行っている高等教育や教育課程の編成、単位の認定、学位の授与などは大学が国から負託された権限であり、その権限をもつ大学は義務として、自らの教育研究活動について、点検・評価（現状を認識し、長所と問題点を把握し、何を改善し、改革していく作業）を行い、その結果を社会へ説明する責任がある。認証評価制度は大学が実施している点検・評価をより一層充実させ、そのことを社会に説明することで大学が教育研究の質の向上に取り組んでいることを第3者の立場から保証することである。つまり、大学が恒常的に行っている点検・評価を基盤として、大学の諸活動を包括的に評価することを通じて、大学の教育・研究活動等の質を社会に対し保証することが認証評価制度の目的である。

3. 何を評価するのか

新認証評価制度においては次の10の「大学基準」に大学が適合しているかどうかが判定される。

1) **理念・目的**—理念に基づき、人材養成および教育研究上の目的を設定し、公表しているか。
2) **教育研究組織**—理念に基づき、適切な教育研究組織を整備しているか。
3) **教員・教員組織**—理念・目的を実現するために、求める教員像や教員組織の編成方針を明確にし、それに基づいて教員組織を整備しているか。
4) **教育内容・方法・成果**—理念・目的を実現するために教育目標を定め、それに基づいて学位授与方針と教育課程編成・実施方針を明示し、その方針に則して教育上の成果をあげるための教育内容と方法を整備、充実させているか。
5) **学生の受け入れ**—理念・目的を実現するために、学生の受け入れ方針を明示し、その方針に則して公正に受け入れているか。
6) **学生支援**—学生が学修に専念できるように、修学、生活、進路の各分野で適切に支援を行っているか。
7) **教育研究等環境**—学生の修学、教員の教育研究活動を十分に行えるよう、学習環境や教育研究環境を整備し、適切に管理しているか。
8) **社会連携・社会貢献**—社会と連携、協力し、教育研究の成果を広く社会に還元しているか。
9) **管理運営・財務**—明文化された規定に基づき適切な管理運営を行い、適切な事務組織を設置し、十分な財政的基盤を確立し、財務を適切に行っているか。
10) **内部質保証**—理念・目的を実現するために教育の質を保証する制度を整備し、定期的に点検・評価を行い、その結果を公表しているか。

10の大学基準のうち「理念・目的」と「教育研究組織」以外の8基準において「方針」が明確化されているかどうかが重要である。「方針」とは大学の理念・目的を達成するための諸活動の指針であり、認証評価の際には諸活動が「方針」に沿って行われているかどうかが重要な評価ポイントとなる。

4. どのように評価するのか

10の「大学基準」はそれぞれ複数の「点検・評価項目」で構成され、認証評価の際にはこの「点検・評価項目」に基づいて評価を実施して行く。評価に際しては基盤評価と達成度評価の2つの評価方法が採られている。

1) 基盤評価-大学に共通に求められている学校教育法や大学設置基準等の法令要件が遵守されているかどうかの評価。すべての大学に対する厳格な評価。
2) 達成度評価-大学が掲げる理念・目的を達成するために大学がどのような努力を払っているかについての評価。大学の個性を尊重し、長所の伸張につながる評価。

さらに10の「大学基準」について、大学が行う自己点検・評価が適切に機能しているかどうかが評価の重要なポイントである。つまり内部質保証システムが構築され、それが効果的に機能し、改善・改革に繋がっているかどうかが問われている。

5. まとめ

新評価システムで問われている最も重要な事は下記の2点と考えられる。

1) 大学はその理念・目的の達成に向けた諸活動を行っているか。
2) 大学は学内に点検・評価体制を整備し、これを確実に機能させ、点検・評価を適切に実施し、その結果が大学の改革・改善に着実に連動しているか。

SD研修の現状と今後の課題

SD委員会委員長　田　口　知加子
（経理課長）

突然ですが、問題です。

Q1. 2012年度　学部入学生の定員は何名？
Q2. 情報演習室は、何部屋ありますか？
Q3. 東日本大震災を機に立ち上げた学生のボランティア名は？
Q4. 大学のモットーである(　)に入る文字は？『知恵のみちを歩み(　　)と(　　)に奉仕する』
Q5. 博物館に併設されている文庫名は？

結果はいかがでしたか？

これは、第一回SD研修会で職員に問いかけたものである。その結果は、純心に居ながら、純心大学の情報をいかに見過ごしていたか気づかれた方も多いであろう。これは常日頃からあらゆる情報にビビッとアンテナを張っているか否かでもある。

今年のSD研修の目的は、「気づく習慣を身につける」ことから始めた。純心大学職員は、一般企業と比較すると特殊な環境下にある。まず、勤続年数20年以上の者が多く、職務や人事の変動が少ないことなどから、仕事に対してあまり変化を求めない現状維持的傾向があり、スキルアップや自己啓発力に疎いところがある。

しかし、大学を取り巻く社会環境には厳しいものがあり、18歳人口の低下、国立大学の独立行政法人化、さらにステークホルダー側に何を伝えるかなど様々な問題を解決する一策として、FDやSDの重要性が高まっているのが現状である。

SDの一般的解釈は、事務職員の資質向上のための組織的な取り組みとある。組織的＝職員全員で何かをしなければならない？資質向上＝特別に勉強しなければならない？この「ならない？」がSD研修に圧迫感を与え、職員の拒否反応を招きがちだった。今年は、その圧迫感を、やりたい感に変化できればと様々な取り組みを考えている。

8月7日　SD研修会の様子
グループに分かれて、タイムマネジメントについて意見を出し合った。

その第一歩として

・雑誌、新聞の見出し、学内広報誌、回覧新聞に目を通す！
・学年暦をチェックし、大学の様々な行事に関心を持つ！
・ビジネス書からの知識で各自の業務にメリハリをつける！

誰にでも、何時からでも、できる事をやる。そこから出来そうな事をやる。これが自己啓発への導きになればと思い、職員に提案した。

しかし、いざ業務中に新聞を読めと言われても日常業務が繁忙では死活問題である。そこで、日常業務を見つめ直し、かつ私学職員として知るべき情報を得る時間も欲しいというジレンマを救う手段として時間の有効活用を理解したいとの思いから、第2回SD研修会は、外部から講師を招き、「タイムマネジメント研修」を開催し、僅少ながらも業務改革へと踏み出すベースが整ったと思う。

職員数が低下するなか、業務領域の複雑化に伴い、職員に求められる業務も管理運営業務主体から課題解決業務主体へシフトしつつある。事務と教員の両方からの体制が整うことが、学生達が学ぶ居場所として長崎純心大学をダブルクリックし、のちに有益な学生生活を過ごせるのではないだろうか。

しかし各々が抱える時間有効活用に悩む問題を解決するには、個人と課内とそして大学、教員の協力が欠かせない。今年のロンドンオリンピックでは、日本人に新たな輝きがあった。それは団体戦の強みである。次の人に絶妙なパスを出す、誰かのために繋げる、これらの連携プレーの結果が出たオリンピックだった。

私たち職員が幅広い業務知識を身につけ、教員との連携体制を強化しながら事務改善に取り組めるよう、SD委員会としても職員に自己啓発誘因アイテムを提供していきたい。

2012（平成24）年度　SD委員会活動	
5月8日	第1回SD研修会「SD研修の実施にあたって」
6月8日	＜Web刊行物＞　Information. SD No.1
7月28日	＜Web刊行物＞　Information. SD No.2
8月7日	第2回SD研修会 「タイムマネジメント研修」㈱インソース
12月27日	第3回SD研修会

答え　Q1　300　／Q2　4　／Q3　リトルトリー／Q4　人　世界／Q5　磯村平和文庫　キリシタン文庫

教育開発推進委員会活動報告

2011（平成23）年度

■教育開発推進委員会

第1回　平成23年4月27日
第2回　平成23年9月28日
第3回　平成23年10月19日
第4回　平成23年12月7日

■学生による授業アンケート

前期　平成23年7月11日～7月30日
後期　平成24年1月23日～2月13日
＊質問項目の改定
＊教員へフィードバックアンケート実施
＊集計結果の公開（ホームページ）

■教員相互による授業参観

平成23年11月7日～11月18日
＊教員へフィードバックアンケート実施

■教職員FD研修会

平成24年3月7日　13:00～17:00
＊アンケート実施

■出張等

＊平成23年6月4日～6月5日
大学教育学会第33回大会「大学の質とは何かーふたたび大学のレゾンデートを問うー」
＊平成23年6月27日
高等教育活性化シリーズ「女子学生増加シナリオと確保方策」
＊平成24年2月20日
大学教員のためのFD研修会「大学授業デザインの方法」
＊平成24年3月24日
アカデミックスキルとしての英語教育ー学士力育成のための共通教育の取り組みー

2012（平成24）年度

■教育開発推進委員会

第1回　平成24年5月2日
第2回　平成24年7月4日

■学生による授業アンケート

前期　平成24年7月9日～7月28日

■出張等

＊平成24年8月31日
第2回大学コンソーシアム八王子FD・SDフォーラム「学生が育つ教育～良い授業を支える工夫を共有しよう～」

図書・雑誌案内

※これらの本は、教育開発推進室で閲覧できます。貸出しを希望される方は、図書館で手続を行ってください。

■定期購読雑誌等

「高等教育研究」
日本高等教育学会編　玉川大学出版部発行
「IDE現代の高等教育」 IDE大学協会発行
「INTERNATIONAL REVIEW OF EDUCATION」
UNESCO INSTITUTE FOR LIFELONG LEARNING

■図書

「成績評価の厳正化とGPA活用の深化」
半田智久著　地域科学研究会高等教育情報センター

「大学では教えてくれない大学生のための22の大切なこと」佐藤剛史編　西日本新聞社

「大学生のための『社会常識』講座」松野弘編著
ミネルヴァ書房

「大学のグローバル化と内部質保証」 早田幸政・望月太郎編著　晃洋書房

編集後記

長崎純心大学FDニュースレターの記念すべき第一号が発行されました。本学では、これまで様々な方面でFD活動が活発に行われてきましたが、教職員の方々へ十分に、その内容を知っていただくことが難しい状況でした。ニュースレターの発行により、すべての関係者と基本的な情報の共有ができるようになれば、様々な分野でより深い議論がなされ、より良いFD活動へとつながることでしょう。さらにニュースレターにより、広く本学のFDの取り組みについて知っていただき、読者の方々からフィードバックを受けて、FD活動が活発になっていくきっかけとなれば、こんなにうれしいことはありません。お気づきの点、アイディアなどございましたら、教育開発推進委員会のメンバーまでお寄せいただけると幸いです。

編集担当　石田憲一　畠山　均　横山沢枝

長崎純心大学　教育開発推進委員会
〒852-8558　長崎市三ツ山町235　TEL095-846-0084　FAX095-849-1894　URL http://www.n-junshin.ac.jp/univ/